れきし散歩

石版画「関駅 地蔵堂」

はじめに

東海道を描いた版画といえば、誰もが歌川広重の浮世絵を思い浮かべることでしょう。歌川広重は、江戸時代末に多くの東海道五十三次シリーズの浮世絵を刊行し、人気を集めました。その後、明治時代になっても、東海道は名所として人々の関心を集め、多くの絵画の題材とされています。今回は、そうした明治時代の絵画の中から、１枚をご紹介しましょう。

石版画「関駅 地蔵堂」

石版画「関駅 地蔵堂」（上の写真）は、明治24（1891）年～25年に、大山印刷所（東京市京橋区加賀町）・東陽堂（東京市日本橋区葺屋町）発行で、丸善書店（東京市日本橋区通三丁目）から発売された石版画による東海道五十三次シリーズ「石版『懐古東海道五十三駅真景』」の１枚です。

図中には、地蔵院本堂とその門前に並ぶ「会津屋」、「洋館屋」の屋号を持つ伝統的建造物が描かれています。「会津屋」は、江戸時代に「関で泊まるなら鶴屋か玉屋、まだも泊まるなら会津屋か」と謡われた関宿を代表する旅籠屋のひとつで、朝起きると２階から地蔵院を拝むことができることで有名でした。また、明治時代には、日本を代表する輸出品であった生糸を生産する製糸業も始めました。

一方、「洋館屋」は江戸時代末に建築された町家ですが、明治時代に洋風の円形窓などを漆喰によって付加する改造が行われ、関宿の建物への洋風意匠取り入れの最初期の例とされています。この洋風意匠がもととなって「洋館屋」の屋号が生まれました。

「洋館屋」の建物は、一時「会津屋」が所有しており、製糸業に関連して、いち早く洋風意匠が取り入れられたのではないかと考えられていました。

洋画家亀井竹次郎の足跡

平成６（1994）年、この石版画の原画である油絵が発見され、福島県郡山市立美術館に収蔵されることとなり、石版画作成の経緯が明らかとなりました。※

原画の作者は洋画家亀井竹次郎（安政４（1857）年頃～明治12（1879）年）で、明治10（1877）年５月～６月に、実際に東海道を旅して下絵を描き、それをもとに翌明治11（1878）年に油絵を仕上げました。竹次郎は原画を仕上げた翌明治12（1879）年に亡くなっており、版画は竹次郎の死後に発行されています。こうした経緯から、石版画に描かれた景観は、明治10（1877）年のものであることも明らかとなりました。

中村製糸と「洋館屋」

中村安五郎が製糸業を創業したのは明治28（1895）年とされています。創業当時は「会津屋」の旅館業との兼業で、製糸工場も旅館の裏を使った小規模なものでした。明治40年代になって機械化のため関町新所（明神）に工場が新設され、大正頃には旅館業を廃業し、製糸業に専念して事業の拡大を図りました。さらに、大正８（1919）年には、埼玉県入間の「石川組製糸所」と合併して「石川組中村製糸所」となって、従業員が700名を超える県下でも有数の製糸会社へと発展しました。

さて、ここで考えると「会津屋」の製糸業の創業が明治28（1895）年とすれば、明治10（1877）年に既にあった「洋館屋」の建物の洋風意匠を、製糸業と関連させて説明することは難しくなります。まったく別の理由があったものと思われますが、現段階では不明というほかありません。

東海道に関しては、沿道を描いた多くの絵画が残っています。これらの絵画は、絵として楽しめるだけでなく、郷土の歴史に関するさまざまな情報を私たちに提供してくれます。

※原画があることは、八木淳夫先生（亀山市文化財保護審議会委員）からご教示いただきました。原画は『描かれた東海道五十三次 亀井竹次郎 懐古東海道五十三駅眞景』（平成９年、福島県郡山市立美術館）に掲載されています。